



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.142 / 2018.FEB

(月1回発行)

平昌オリンピック 男子スケルトン競技 宮嶋克幸選手が出場～本学卒業生も2名参加～



左写真：(右から) 平昌五輪に参加した宮嶋選手、小口選手、高橋選手 右写真：宮嶋選手

2月15日と16日の2日間、平昌オリンピック男子スケルトン競技が韓国・平昌のアルペンシアオリンピックスライディングセンターにて開催されました。本学から体育学科4年生の宮嶋克幸（北海道一札幌・丘珠高校出身、初出場）とOBの高橋弘篤選手（平成19年体育学科卒、宮城一富谷高校出身、2回目）が出場し、本学からは阿部芳吉学長と進藤新助手が現地へ応援に駆け付けました。

レース当日は、メディアで取り上げられているような極寒ではなく、外気温、氷温ともにレースに相応しい環境で、心地よい天候でした。宮嶋選手は持ち味である滑走技術をどこまで活かせるのかという点と、プッシュタイム（スプリント局面）をトップ選手とどのくらい短縮することが出来るかが勝負のポイントでした。

レースの直前・最中・終了後には、仙台大学LC棟で実施された柴田町主催による「2018平昌オリンピック 男子スケルトン選手を応援する会」とスカイプを用いて、LC棟とレース会場とを繋ぐという試みも行われました。阿部学長からは「宮嶋選手・高橋選手を一致団結して一緒に応援しましょう！」と力強くメッセージを頂き、場所を問わず会場にいる選手たちを応援する事が出来ました。

多くの方々のご声援を受け、両選手はスタートに立つことが出来ましたが、3回戦までの合計タイムにより高橋選手は2：35.58で22位、宮嶋選手は2：34.69で26位でした。上位20位以内までが進める4回戦には惜しくも進出することができませんでした。

(次頁に続く)

＜目次＞

平昌オリンピック 男子スケルトン競技に宮嶋克幸選手が出場～本学卒業生も2名参加～	1
柴田町主催により「2018平昌オリンピック男子スケルトン選手を応援する会」を開催しました	2
・「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」事前キャンプに係る施設等使用に係る協定締結式 本学を会場に開催	3
・「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」で池田准教授が本学の事例発表	4
・韓国伝統武道・警護・文化研修プログラムを実施しました ・龍仁大学校からの短期留学生在が本学で学ぶ～最終日にはフェアウェルパーティーを開催～	4
ゴンザガ大学視察報告	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp



宮嶋選手はレース後に、「今までずっと目指して来た舞台に立ててとてもうれしい気持ちになりました。しかし、五輪での目標とはかけ離れた結果になってしまい、悔しさの残る五輪になりました。今大会の悔しさ、経験を糧に4年後の北京でメダルを取る為に繋げていきます。」と初五輪での感想と今後について話してくれました。

また、16日と17日には同会場で女子スケルトン競技も開催され、本学OGの小口（旧姓・大向）貴子選手（平成19年運動栄養学科卒、石川一輪島高校出身、初出場）が出場し、19位という結果でした。

平昌五輪では、3名の本学関係者が選手として参加することが出来ましたが、大きな目標達成とはならず、韓国チームの快進撃を目の当たりにし、自分達の可能性をどうやって強化していかなければいけないのかを改めて考えさせられた五輪となりました。次は4年後の北京五輪です。五輪で学んだことは五輪で果たせるよう4年後を見据え、着々と活動します。そして、次も仙台大学から選手を輩出できるよう再スタートしていききたいと思います。

（報告：新助手 進藤 亮祐）

柴田町主催により 「2018平昌オリンピック男子スケルトン選手を応援する会」を開催しました

韓国で行われた2018平昌オリンピックスケルトン競技日本代表の宮嶋克幸選手（体育学科4年）と高橋弘篤選手（平成19年卒）を応援する会が2月15日（木）、本学LC棟を会場に開催されました。会場には滝口茂柴田町長をはじめとする柴田町関係者や町民、本学関係者、また、明成高校の中川先生とスケルトンのエースオリンピック代表にも選出された郷内翔さん（1年）など約100名が集まり、2名の選手に声援を送りました。

翌16日（金）にも応援する会が開催され、学生や教職員が2名の選手を応援しました。3本目の滑走を終えた時点での結果は、高橋選手が22位、宮嶋選手は26位の成績で惜しくも4本目の滑走に進出することはできなかったものの、これまでのトレーニング成果を十二分に発揮したすばらしい滑走で、会場で声援を送った皆さんにだけでなく、柴田町民や仙台大学関係者に大きな勇気と感動を与えました。

なお、会場ではスケルトンソチオリンピック代表の小室希さんと本学大学院生でソチオリンピックボブスレー日本代表の黒岩俊喜さんが競技の詳しい解説を行いました。選手ならではの大変わかりやすい説明に、集まった新聞社やテレビ局の記者の方々から多くの質問が寄せられると、二人はにこやかに答え、スケルトン競技の新たな魅力を発信することができた機会となりました。



熱気に包まれた「応援する会」の様子

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」 事前キャンプに係る施設等使用に係る協定書締結式 本学を会場に開催

2月26日（月）、パラオ共和国のホストタウン登録をした蔵王町が、東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプの施設使用の協力を近隣市町村と本学に要請、仙台大学、角田市、白石市、柴田町を加えた計5団体による事前キャンプに係る施設等使用に係る協定書締結式が執り行われました。

現在、パラオ共和国から要望が出ている種目は、柔道、陸上、水泳、アーチェリー、レスリングの5種目で、柔道は仙台大学、陸上は角田市、水泳は白石市、アーチェリーとレスリングは蔵王町が夫々施設提供を行います（宿泊先は蔵王町遠刈田温泉を予定）。本学が会場となる柔道は女子63kg級の選手1人、コーチ1人の事前合宿が予定されており、今年は6月末から7月上旬において行われる予定です。

パラオ共和国は昨年4月に政府関係者5名が来学された際、本学関連施設を見学、柔道においては南條充寿教授の説明を受け、その後、仙台大学での柔道の事前合宿練習（指導含む）を強く要望してきた経緯があります。尚、本学会場となる東京2020オリンピック・パラリンピック事前合宿は、ベラルーシ共和国新体操、ハンガリー柔道（ホストタウン事業としての採否は未定）に続き3カ国目となります。

（報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 近江 康宏）



「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」で池田准教授が本学の事例発表

2月23日（金）に学校経理研究会主催の「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」が全国の大学関係者100名弱の参加により開催され、仙台大学も事例発表を行いました。

本フォーラムは、スポーツ庁が提唱している大学スポーツの改革～日本版NCAA設立に際して、全国の大学に対する改革戦略の理解促進と浸透を目的にして、スポーツ庁の担当官も招聘して、全国各地で巡回開催されています。

本学からは、インスティテューショナルオフィサーの池田敦司准教授が登壇し、大学の運動部活動のみならず、学生アスリートに対するサポートシステムや、地域におけるスポーツ健康増進活動、新たな事例報告を行いました。

また、フォーラムの後半では、大学スポーツ改革に向けて、スポーツ庁企画官、大体連理事等とともに意見交換を行うライブセッションも行いました。



本学の事例を発表する池田准教授

韓国伝統武道・警護・文化研修プログラムを実施しました

平成29年度海外留学交流支援制度で国際交流提携校の韓国・龍仁大学への研修プログラムが採択されたことにより、2月3日～14日までの日程で現代武道学科の学生5名が参加しました。

プログラムの主な内容は、韓国語、剣道、テコンドーそれに文化施設見学です。期間の初めは気温が最低で-16℃、日中でも-8℃と厳しい寒さの中、剣道やテコンドーの練習に参加し、学生寮では剣道部員や他のクラブの学生達と楽しい交流を行いました。

プログラムの期間中、お世話を頂いた鄭先生をはじめとする龍仁大学の先生方、学生の皆様さらに、本学「韓国伝統武道」担当の金先生（光州大学）に感謝を申し上げます。

（報告：現代武道学科長 教授 斎藤浩二）



龍仁大学校からの短期留学生在本学で学ぶ ～最終日にはフェアウェルパーティーを開催～

1月15日（月）～2月2日（金）の間、龍仁大学校（韓国）から6名の留学生在本学で日本語の習得等のプログラムを行いました。

最終日にはフェアウェルパーティーが開催され、留学生は、研修のまとめとして留学期間中に学んだことや茶道・剣道など体験したことを一人ひとり日本語で発表しました。また、発表後には留学生全員で日本語の歌を披露するなど、楽しいひと時を過ごしました。

（報告：国際交流センター）



フェアウェルパーティー後の記念写真

ゴンザガ大学視察報告

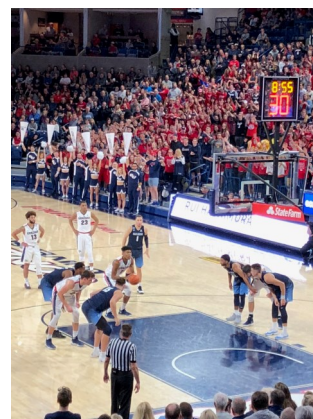


2月1日～5日に、ワシントン州スポケーンにある、ゴンザガ大学を訪問しました。ゴンザガ大学はカトリック系の大学で、アメリカ国内の大学ランキングでも常に上位に位置している名門大学です。さらに、スポーツ強豪校としてもその名を知られていて、中でもバスケットボールチームは実力もあり、NBA選手やWNBA選手を多く輩出しています。そのゴンザガ大学男子バスケットボール部に、明成高校出身の八村塁選手が在籍しています。今回は、八村選手の近況視察に加え、学長や副学長などへの挨拶、また新しく建てられた施設の見学などを行ってきました。朴澤理事長・学事顧問、マーティ・キーナート上級研究アドバイザー、事務職員のマイケル・マンキンさんと助教の菅野で訪問して来ました。

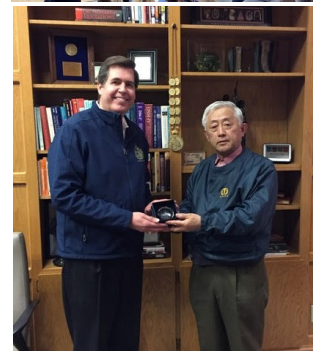
初日は、学長への挨拶を終え、八村選手の試合観戦を行いました。大学施設内にあるアリーナで、約6,000人収容できる体育館がほぼ満席に近い状態でした。学生に加え地域の老若男女が一斉に集まり、一種のお祭りの様な雰囲気でした。日本の大学では、あまり見ない光景だったため驚きました。八村選手は、前半の途中から試合に出場していました。高校の時より体格が良くなり、怯むことなく戦っていましたが、八村選手はこの試合、なかなか思うようなプレイができていないように見えました。

翌日は、筆頭学長補佐にお会いし、大学パンフレットを基に色々な説明をしていただきました。その後、アスリートの日常的な指導や授業の管理を行っている部署に訪問し、八村選手担当の2名の女性の方に一週間の予定や八村選手の生活態度などを伺いました。単位などは問題なく取得し、学業も順調なようです。英語力も身に付き、授業の話の7割から8割程度理解できるようになったということです。運動部を管理するAthletic Departmentの新しい施設の案内もしてもらいました。建物は数日前に完成し、未だ内装の装飾途中でしたが、体育館やファン専用ラウンジがあり、とても素晴らしい施設でした。

午後からは、練習風景の見学をし、その後八村選手と合流しました。だいぶ生活にも慣れ、バスケットボール選手としての自分の課題や、求められていることなどが分かってきたそうです。楽しそうに大学生活の話をしていました。しかり、やはり前日の試合は納得がいく内容ではなかったようです。翌日に期待し、その日は別れました。



最終日は、4年間ホームゲームで勝利していない、ユタ州のBrigham Young大学との試合でした。リードしては追いつかれ、一進一退の試合でした。交代で八村選手がコートに立つと、ファールをもらいながらシュートを決めたり、リバウンドに絡んでボールを奪ったりと大活躍でした。相手チームのセンターでエースの選手もしっかりマークし、いい流れを呼び込んでいました。試合は、68-60でゴンザガ大学が勝利しました。4年ぶりにホームで勝利を掴んだ試合で、八村選手はチーム最多得点の15点を決めていました。翌日の新聞には、八村選手の記事や写真がたくさん載っていました。



ゴンザガ大学男子バスケットボール部は、私たちが訪問時はWest Coast Conference (WCC) で11勝1敗での二位につけていましたが、帰国後の試合では、1敗しているSaint Mary'sにも勝利しているため、WCC 6年連続制覇の可能性もあります。今後もゴンザガ大学男子バスケットボール部八村選手の活躍が期待されます。

今回の視察を終え、大学側の学生に対するサポートの充実、町と大学の連携など、たくさんのことを体感し、学ぶことができました。“日本ではあまり見ない光景”と先に書きましたが、“仙台大学らしく”取り入れられることもあると感じ、日本版NCAA構築への示唆を得ることができました。今回、素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝しつつ、今回の経験を今後の仙台大学の発展と、監督を務めている女子バスケットボール部強化に活かしたいと思います。

(報告：助教 菅野恵子)

